

巻頭言

農業県山形の生き残りをかけて

鶴岡ウイメンズフォーラム代表 東山 昭子



平成十六年四月から、国の米政策がまた大きく変化する。生産農家は生産技術と収穫のみを考える事に安住せず、販売の最後まで見届ける経営主体者への変革が求められる。さらには、地域の産地づくりや、担い手づくりまで、地域に密着し、かつ産地の特色を明確にした総合的な農業政策を自ら策定して取り組むことが、求められるようになった。稲作農家の高齢化、後継者不足が進行する中で、厳しい改革だが、農業県山形の生き残りをかけ、新たな地場産業の創出を内包する取り組みを、元氣よく推進する工夫が問われている。

今年立春を迎えず、どうする！鶴岡の農業 どうする！鶴岡の商業」をテーマとする異業種交流が開催された。鶴岡市認定農業者会議と鶴岡商工会議所青年部が主催し、町づくり団体が加わってのパネルディスカッションに、同じフロアからの発言も交錯し、次回以降に期待の持てる討論が展開した。「どうなる」ではなく、「どうする」と主体的に自己責任を明確にした、それぞれの体験発表が重なったからである。その翌日、前日の熱気に重なる形で、桂宮宜仁親王殿下のご裁下による「緑白綬有功賞」を受賞した鶴岡市の佐藤祐三氏の祝賀会が開催された。消費者のニーズに対応した鶏卵の直販と稲作とを組み合わせた企業の経営の確立と、畜産のコンサルタントや後継者育成・直売所の運営管理等でリーダーシップを発揮し、地域農業の活性化と発展に幅広く貢献したとする受賞事績の披露を聞きながら、時代を先駆けて生きてきた人の汗と意気を感じた。まさに農業者に今求められている経営感覚が、経理記帳実践や農業法人化、自主運営による企業型産直経営を顕現する顔で、農業委員を務める和子夫人と共に、にこやかに満堂の祝福を受けて、寒梅の香を放ったのである。

農業も商業も全般的には、手放して喜べる現状でないことは、はっきりしている。BSE、鳥インフルエンザ等と重い現実もあるが、眼を凝らせば各所に元氣な人はおり、元氣な町はある。元氣な女たちがいる所は、こころから町全体が輝いている。出生率全国第一位、

一人当り農業生産額全国第一位の鹿児島県沖永良部島は、買いたたかれから脱却し、学びの持続の中で、在来種の育成と先進的品種を併育し、小型飛行機で運び鮮度を保ち付加価値を高めている。どのような価値や意義を日々の首農に求めるか、高い志を地域文化の農業に託して、自然保護、有機栽培とで売る宮崎県綾町。朝の畦道の草刈りに野の花を拾い、観光客の食卓を飾る大分県由布院のおもてなし。致道博物館礎石にある「衆力を結び成して功を為す」(町民の力を結集して成功している)福島県三春町。大量生産、大量消費の時代のかげりの中で、人間らしい生き方を凛と重ねて、農業・漁業と商業観光が一体化して、地域コミュニティーの元氣を新生している町々があちこちに存在する。そして、山形県内のそうした元氣とその源を探り、今後の取り組みを展望する大胆な提言を一書にまとめ、庄銀総合研究所編になる「地域経済の新生とリレーションシップバンキング」も、この一月刊行された。現今、学びは必須である。何を智慧として磨くべきか、愚痴を言うゆとりはない。「持続的発展を可能にするヒント、未来社会の扉を開くカギは、現場に求める限りほかない」の厳しさの上に、「現場で果敢な挑戦が行われている限り希望の持てる未来は構築できる」励ましに充ちている。「火種は自らの胸底に」である。

先の交流会の折、「金峰山に登って鶴岡を眺めたら、ここにもたくさんのお客様がいると気がついて感激した」と語る農業経営者の言葉が印象的だった。消費者である地域社会の一員として、豊かな自然、伝統の味、顔のわかる隣人、独特の生活文化を共有しあう者同士、地場で生産されたものを最短距離で消費しながら、安心と安全、安定を楽しみたい。そのためにも、いたずらに形の良さや安価のみを生産者に求めない意識改革を学びの中で共有しあい、広く全国に、消費者を「お客様」として発信する経営を望みたいものである。地元生産者・農業者の生産現場から発する感動と苦悩の人間の発信が待たれている。